

---

# 現実と幻の境域

にゃあプー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現実と幻の境域

### 【Nコード】

N1202U

### 【作者名】

にゃあプー

### 【あらすじ】

俺は普通の人とは異なっていたが、それを隠してこれまで生きてきた。真実を知る叔母と、俺とで密かに2人で生活してきた。だがそんなとき叔母が突如交通事故で亡くなった。そして叔母は亡くなる直前にある文字を残した・・・『ネメシス』と。この言葉により俺は異世界へとさ迷い始めることとなる

## はじまりの時

今の自分を捨て、現実と違う場所に一度は行ってみたいと思ったことはないか？by俺

——— だってこんなことを思ってる場合じゃない、俺は現在森の中を必死に逃走中。

何から逃げてるだつて？それはアレだよアレ。

俺の後方には体長180cmもあるうかという赤毛の大猿が、木々を渡りながら迫ってきている。

俺がたまに方向を変えて走ると、猿も方向転換する際に、勢いで木が倒れてしまうほどの猛スピードで迫ってきている。

だが猿がそんなスピードにもかかわらず、俺はまだ追いつかれてはいない。何故か俺はこの世界ではいつもより体が軽く、俺もまた、普段ならありえない速度で木々を避けながら走っているからだ。

猿から何度目か分からないくらいの火炎弾が飛来してくる。放たれるたんびに走る方向変えたり、避けたりして俺はなんとか生き延びてきた。俺が避けるごとに火炎弾が変わりに受けた木が、燃えあがっていたりする。わずかにだが辺りの気温も上がってきたように感じる。

——— うお！

俺は何度目かの方向転換をする際、木の陰で見えていなかった樹の根に足を引っ掛け躓いてしまう。もちろん、普段とは違う速度で走っていた俺には反応などできず、地面にダイビング。

「くそっ！何でこんなとこに突き出たんだよ！」

俺は悪態をつきながらも起き上がる。だが俺の背後で何かが着地し

た音が俺の耳に届いた。

俺は嫌な予感とともにゆっくり振り返ると、大猿は燃えている太い腕を振り上げ、今まさに俺に振り下ろす瞬間だった。

猿は俺が転んでる合間に素早く接近し、頭上の木から飛び降りて俺の真後ろに着地したようだ。

ちっ、俺の人生はこんなところで終わるのか…

今日は2月14日、世間一般ではバレンタイの日。女性からチョコを貰えたりする日。だが俺には関係ない、彼女もいた経歴もないし、今日は彼女のいない連中と馬鹿騒ぎをしてくる予定である。

俺なんて珍しい奴を本当に受け入れてくれる人は、もうこの世にはいない。

俺は見た目は普通の日本人のように黒髪に黒目だが、本当は白い髪に白い目の姿をしている。髪は黒く染め、目にはカラコンを入れて常に黒くしている。

両親は生まれたばかりの白い俺を気味悪がり捨てた。それどこかで聞いたのか、伯母の時子さんが拾ってくれて育ててくれた。時子さんは金髪で碧眼で見た目は外国人のようだが、生粋の日本人。結婚はしておらず、一人寂しく暮らしていたため、こんな俺でも実の息子のように可愛がってくれた。

そんな時子さんも交通事故で亡くなった。対向車線からトラックが突っ込んできて衝突、時子さんが運転していた車は大破した。それでもわずかに息があったのか、時子さんは死ぬ間際『ネメシス』と窓ガラスに血で書き残して亡くなった。

俺は時子さんが残した『ネメシス』というのが気になってネットで

調べると、ギリシヤ神話で神の怒りと罰とを擬人化した女神を示した言葉であると分かった。時子さんは神の怒りでもかったとでも言いたかったのか？とも思ったが、なんとなく違うような気がする。時子さんが残した最後のメッセージは今でも俺にはしっくりくる解答が出てきていない。

後から時子さんの事故を詳しく調べてみると少し奇妙な点がある。相手のトラックを運転していた人物は、事故現場にトラックを残して消えた。まさしく『消えた』だった。警察がトラックを人物を捜索したがこの世界に居なかったのごとく消息を絶っていたし、会社も部屋もそんな人物は存在しないかのごとく消えていたらしい。

そんな事故もあったが、今では俺は一人暮らし状態だ。金は十分あるから何も問題ない。

時子さんの葬儀の際に、実の親を始めて見た——やっぱり金髪——が、特段話すことも無かったし、相手も俺とは一言二言話したただけで、ほとんどしゃべらなかった。

時子さん生きていた時、チラッとだけ両親は海外を飛び回っている話をしていたことがあったが、本当かどうか分からない。今までと同じように1度も連絡はしてこない。まあ今更連絡してきても、俺の親は時子さんだけなんだが。

いつの間にか昔のことを少し思い出してしまった。何気なしに腕時計を見てみると、

——げっ

連中と待ち合わせの時間は18時、現時刻17時50分。ここから集合場所に行くまでに走って約10分

。マズイ…非常にマズイ…

去年の時は一番最後に来たと言うことで、飯を一人1品ずつおごらさせられた。奴等はどういう時は容赦なく高い物頼むから勘弁して

欲しい。

俺は部屋を出てダッシュで集合場所にむかう。俺より遅い奴がいてくれ！と祈りながら走り、普段は使わない近道を使うために十字路を右に走りながら曲がろうとした時、曲がり角の先から突如車が現れ――

駄目だ！当たる！

反射的に目をつぶり衝撃に備えたが・・・・・・・・・・アレ？

車が俺の体にドンとぶつかるかと思っていたんだが・・・

1分たっただろうか！本当はたった数秒かもしれないが、いつまで経っても衝撃はこない。

薄っすらと目を開けると俺の目の前には衝突すると思った車が、俺に数ミリというところまで迫って停止していた。

助かった・・・・・・・・どうやら運転手の反応が早かったからギリギリで俺は無傷で済んだらしい、車の進路から退いて運転手に謝ろうつと思ったが・・・その車には誰も乗っていなかった。気づけば周囲に誰一人もおらず、静まり返っている。

何だ？何が起こってる？そんな理解できない状態に置かれた俺に、突如背後から声をかけられた。

「その貴方、ネメシスのこと知りたくないですか？」

足音もなく突然話しかけられ飛び上がりそうになったが、ネメシス・・・俺の伯母が最後に残した言葉、その単語が出てきたのが一番俺を驚かせた。この状況は伯母と何か関係があるのか？

俺が恐る恐る振り返るとそこには白いシルクハットに、白いマント、さらに白いスーツまで着た全身真っ白な長身の得体の知れない人物

が、俺の少し離れたところに立っていた。親戚の人かと思いい顔を覗いたが、そこには顔ではなく黒い仮面をつけていた。目の所には横に細長く穴が開き、口のところにはUの字に、まるで俺のことを笑っているかのごとく穴があいている。

「アンタなにもんだ？」

「コレハコレハ失礼しました。ワタクシ、白紙と申し<sup>はくし</sup>ます。案内人をしております。貴方がトキコさんの息子さんですよ？」

最後にケタケタケタと笑うかのごとく言うのは、癖なのか？非常に気に障る。案内人が、ますます得体の知れない人物だが、こいつはネメシスについて何か重要なことを知っている、そう俺の直感がつげている。

「ああ、そうだ。お前の言っているトキコさんが俺の知っている時子さんならな。」

「トキコさんは貴方の時子さんと間違いなく同一人物ですよ。この状況が証明しています。アナタ、ネメシスのこと知りたくないですか？どうです？」

やはり聞き間違いじゃなかった。確実にネメシスとコイツは言った。

「お前、ネメシスが何を示しているのか知っているのか！」

「ええ、もちろん知っています。それに貴方の伯母の時子さんもよく知ってますよ。しかしネメシスのことを言葉で説明できません、日々変化しているものですから。体験していただくのが最も理解できると思われますが……行きますか？ネメシスへ……」

「ネメシスというのは場所のことなのか？……ああ、行ってやる。それでネメシスが何を示しているのが分かるというのなら！」

「では行きましょう。ネメシスへと……」

白紙とかいった野郎が白いマントを広げると、中から大量の本が飛び出してきくる。大量の本は自分の決まった場所でもあるかのごとく、それぞれ俺を囲むように空中で停止したかと思うと、誰も触れてもいないのにペラペラとめくれ始める。

「ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ……」

すべての本が空中で停止しと思ったたら、突然白紙って野郎がそう笑いだすと本も合わせるかのようにバラバラと勢いよくめくれだし、俺の目の前に光の玉が出現する。光が物凄い早さで膨張し、一瞬眩い光に包まれ俺の視界を覆ったかと思うと、いつの間にか俺の前には1本の木が立っており、周囲を見渡すと俺は森の中に一人立っていた。

「はあ、もしかしてテレポートしたの——」

ガサツガサツと俺の頭上から音がし、咄嗟に身構えてしまう。

音のした方向を見ると、太い木の枝の所に、葉っぱとは反対色の大きな赤毛の猿が存在していた。

ヤベエ。生物の本能的に分かる。あの猿は危険だ。

頭の中では警報が鳴りっぱなしだが、俺は音を立てないよう慎重に後ずさる。だがここは森の中、葉っぱや草、木の枝などが地面にあり、音を鳴らさずに動くことなどできるはずがない。

パキッ——俺は細い枝を踏みつけてしまい、音が聞こえたのか猿はこちらに目をむける。それと同時に俺と目があつた。

俺は即座に猿に背を向け逃走、追ってきていないと希望を持ちながら走りながら振り返ると、猿も少し遅れて追ってきているのが見えた。

やっぱり追ってきたか……

しばらく全力走って分かったが、いつもより体が軽い気がする。そ

して全力で走っているが俺の体は一向に疲れない様子も無く、周りの景色もいつも以上に速く過ぎていつているように感じる。

これなら逃げ切れるのでは？と一瞬思ったが、猿も物凄いスピードで追っかけてきているため、離れることはなかった。

だが俺の体がこの状態で助かった、いつもの調子なら一瞬にして追いつかれていたことだろうからな。

大猿と俺の鬼ごっこは少しの間続いたが、猿は何を考えたのか、俺を追いながら口を大きく開ける。

すると猿の口の前に、突然何処からか火の玉が出現する。火の玉は人間の顔くらいの大きさがあり、小動物くらいなら楽に燃やせるかの如くメラメラと燃えている。

ガフツ——と叫びながら猿は火の玉を、俺に向かって物凄い速さで放ってきた。

俺はなるべく走る勢いを殺さず方向を変えると——

火の玉は俺のすぐ側を通りぬけ、木に直撃した。

火の玉が木に衝突した瞬間、爆発とともに炎が燃え広がり、森の一部分が火の海と化した。

## 得体の知れない黒い物体

冗談じゃねえ！なんつー威力だ、あの火炎弾。当たったら確実に死亡コースじゃないか！あつっ！

完全に燃えている木の脇を走って通過しながら、俺と猿の鬼ごっこがまた再開した。

しかし今更ながらあの赤毛の巨大猿のありえなさに気づく。あんな巨大な赤毛猿、誰からも聞いたこともなく、辞典とか映像ですら見たことない。さらに火の玉を放つなんて地球じゃ完全にありえない。俺はレポートをしたんじゃなく、白紙って野郎に異世界もしくは違う惑星に連れてこられたんだな。ここ地球じゃないんだな。

時々猿は先程と同じように火の玉を飛ばしてきたが、その都度俺は方向転換をしながら何度も避け続ける。だがそんな鬼ごっこも終わりを迎えていた。

俺は木に根に足をとられ躓き、猿に背後にまで近寄られ、今俺の目の前で猿の燃えている腕が振り下ろされようとしていた。

ネメシスのことも何も分からず、俺の人生はこんな猿に殺されて終わるのか……。スローモーションで振り下ろされる腕を見ながら俺はそう感じていた。

だが突然飛来した何かによって、あたり一面が白く霧になった。飛来した物のおかげか、振り下ろされた腕は俺を外し、霧の中から現れた誰かに襟首を持たれ、いつの間にか俺はひきずられて走っていた。

「何してんのよ！」

霧でよく見えないが、近くから凜とした女性の声が聞こえてくる。

返答しようにも襟首を持たれひきずられて動いているので、首が絞まって喋れない。

くっ、苦しい。こんな窒息死なんて嫌だ、死ぬらなさっきの方が幾分かマシだ。

俺の襟首をひっぱてる腕を必死に叩いてアピールすると、相手も気づいたようで霧を抜け少し開けている場所に、俺を放り投げた。変な状態から投げられたため、

「グヘッ・・・」

受身などとれず背中から地面に落ちる。

背中いてえ」

「けほっけほっ、くそっ、何すんだよ、てめえ。」

「それが助けた恩人への返事なの？まあいいわ。貴方はとつとつココから消えなさい！邪魔よ！」

確かにこの女性が助けてくれなかったら、俺は今頃猿によって潰されて殺されていた。それは確かだっただろう。

俺を助けた女性は目は少しつり目のキツイ感じだが顔は整っており、体はスラッとしていて綺麗な人だった。髪は金色のストレートをポニーテールにして身体には銀色の軽装を装備しているし、腰には片手剣、背中に何故か黒い刀を背負ってる。この黒い刀が異様な存在感を醸し出しているので、無ければ凛々しい西洋の女性騎士っぽく見えるのに、なんともちぐはぐというか…調和がとれていないというか…黒い刀が雰囲気をぶち壊してる。

「ちっ、一応言っておく、ありがとう助かった。これであの猿から逃げられる。」

「ふん、いいわよ。人として当然のことをしただけだわ。それより逃げるなら早くしなさい。さっきの私の労力が無駄になるじゃない。

「

この女性の指した方向を振り向くと、先ほどまでの霧は跡形も無く消え、あの赤毛猿がこっちを睨んでいるのが見えた。

このくらい距離が開いていれば、また鬼ごっこになつていずれ逃げるかも知れないが、今はこの名前も知らない女性がいる。残していくには罪悪感があつたが、俺がいても役に立たないし逃げることにする。

俺が背を向けて走りだすと、猿は俺しか見ていないのかこちらに向かつて走ってきたが、俺と猿の間に名前の知らない女性が割り込む。俺の背後から金属が何かに数回ぶつかるような音など聞こえたが、俺は前だけ見て全力で走り続けた。

しばらく森の中を一人で走っていると

「どうしたんです？ そんなに一生懸命走って。もしかして現実逃避行中ですか？ ケケケケ」

走っている俺の左の上空にいつの間にか黒い猫が飛んでいた。

突然の乱入者に俺は足を止め、右に軽くステップし、空中に浮いている猫と距離をあけて観察する。

よく見れば猫じゃないな。空を飛んでいる時点でまず普通の猫ではないし、目が赤い宝石が埋め込まれたように輝いている。さらには尻尾が狐みたいにモフモフとしていて大きいが3本も生えている。

「なんだお前？」

「おっと、気づきませんか。私、黒髪くろかみと申します。白紙と対になる存在でして、こちら側の案内人ですよ。ついでに中身は同一なので黒髪が呼びにくかったら白紙でも構いませんよ。ケケケケ」

白紙…一瞬首絞めてやろうかと思つたが、今更ながら白紙についても殆ど何も知らないし、こつちの知識も何もないのでこいつが言つてることが、真実かどうか判断する材料がない。ので保留。一応本

当ことを言ってると思うとするか・・・

「お前もここに來たのか？ いやお前が俺を運んだんだから來れるわな。 んで今まで何してたんだよ！ こっちは巨大な猿に追われてたんだぞ！」

「貴方はネメシスのこと、知りたかったのではないのですか？ あんな猿で驚いていてはこの先思いやられますね。 ケケケケ」

「あんな猿って十分非常識な猿だろアレ。」

「でもアナタにあの猿を倒して貰うのが一番早く理解してもらえ方法なので… ほらそこに落ちてる剣を拾ってちゃっちゃんと倒しちゃってください。」

白紙が尻尾の1本でさした先を見ると刀が落ちていた。 少し距離が開いていたが、森の中でなぜが見つけやすいように刀の周りだけが草1本も生えておらず、土の地面に落ちていたので簡単に見つけられた。

何でこんなところに都合よく刀が落ちている？

近くに行きよく見れば、柄頭に小さな赤い宝石がついている黒い刀が落ちており、コレは先ほど俺を助けた女性が背中にしていた物である。 この刀は女性の雰囲気をぶち壊していて俺の印象に深く残っていた。

「何故こんなことにコレが？」

「ほら來ましたよ、とっとその剣を抜いてあの猿にブスリっと刺しちゃってください。」

何が來たんだよ、遠くのほうから金属の音などが聞こえるから、なんとなく予想ができるが…。 そういつて目を向けるとそこには先ほど俺を助けた女性と俺に背中を向けている赤毛猿が戦っていた。

んー何かおかしい。 俺は猿に対して背中向けてまっすぐ森を走って

かなり距離を稼いだにもかかわらず、それなのに猿と女性は俺の方からあっさりとやってきた。

それに猿は俺に背を向けてて全く気づく気配がないし、戦っている女性も俺には気づいた様子はない。俺からハッキリ見える位置に女性と猿はいる、つまり相手からもハッキリ見える距離だということだ。

さらにしばらく俺がここにたたずんでいるにもかかわらず、全くどちらも気づかない。いくら戦いの最中でもこちら側を向いている女性ぐらいは気づいてもいいだろう。

「どうしたんです？今チャンスですよ？猿は背中を向けて気づいていませんし、剣を拾って真っ直ぐ向かえば、あの背中に簡単に刺せますよ。ホラ早く！ホラホラ」

なんかこの黒猫もどきが出てきてから状況がおかしい。もしこの刀で猿を刺しにいったとしても、その一撃で死ぬとは思えないし、俺は反撃をくらって死亡なんじゃないか？この黒猫もどきは俺を抹殺しようと思ってるんじゃないか？

そんなこんな考えている間にキンツと金属特有の高い音が鳴ったと思ったら、女性の剣が猿のよって遠くに飛ばされてしまっていた。俺を助けた女性が命の危機に陥っている。

——クソッ

なんか誰かのシナリオどおりになる感じもするが、目の前で命の恩人——ついでに女性——が死にそうになってるのを見ておけねえ。地面に落ちている刀を拾って、まだ気づいていない赤毛猿の背中に向かって走る。

間に合え！と心の中で叫びながら刀に手をそえ、抜く——

えっ  
・  
・  
・

ガ  
キ  
ッ

起動しますか？（前書き）

書くのに時間がかかりました。戦闘って書くの難しい。

起動しますか？

ガキツと俺の手元から鈍い音が響いてくる。左手に持っている刀を見ると、鞘から1mmたりとも抜けていない。

ちよつと待て、抜けないってどうということよ・・・

何度も走りながらも一度刀を抜こうと試みるが、一向に抜ける気配はない。その間も走り続けていた俺の前には、猿の背中が迫っている。

このときになつて猿が背中側にいる俺に気づき、一瞬こっちに顔を向けた。

俺の睨む目と猿の狂氣の目が合った。

——その瞬間から、俺には巨大な赤毛猿しか見えなくなった。周りの音も風景も女性のことも頭の中からサッパリ消え、周りがスロ―モーションになったかの如く猿が右腕を上げる動きもゆっくりに見える。猿の太い右腕が、俺を捕らえようと裏拳を振るかのように持ち上がり始めているが、このタイミングなら届く前に俺の方が少し先に到達できる。

刀が抜ければ切れたかも知れない…だが抜けない。

俺は意識を切り替え、走る速度を緩めることをせずむしろ足に力を込めて前へスピードを上げ、右肩を前に出し飛び出す——

「うらっ！」

俺の全身の力を使って猿に体当たりをぶちかます。

猿は背中に俺の体当たりを受け、木を何本か巻き込みながらボールのように数メートル吹っ飛んだ。猿の重さなどから考えて普段なら

ありえない威力である。だが俺はこの世界に来てから身体能力が異様にあがっているからだと思う。

しかし計算外だった・・・猿の体毛が思っていたより硬く、体当たりした時はまるで金属の塊に体当たりしたかのように感じた。流石に俺の体の能力が上がっているとはいえ、元は人間の体である。体当たりをかました二の腕当たりから少し血が出る破目となった。

それでも運が良かったほうなのか、痛みが若干ある程度で腕が使えないほどではない。血のドロツとした赤い液体が腕を伝って気持ち悪く、少し気になる程度である。

俺の全力の体当たりで赤毛猿は数メートル飛ばされたにも関わらず、巻き込んで押し掛かっていた木をどけ何もなかったの如く起き上がってきた。

アレでも殆ど傷なしか・・・どうする？刀が抜ければ何とかなる可能性もでてきたが素手じゃ――

「あんたバツカじゃないの？そんな何も装備していないとこで体当たりするなんて……体毛が金属のように硬くて武器ですら切りにくい相手なのよ！」

突如横から声をかけられた。俺の頭ではスッカリ忘れていた女性が不服そうな顔で、いつの間にか横に立っていた。

「それにアンタさつき逃げたんじゃないの？何で戻ってきてんのよ！……いやまあ、助かったんだけどね……」

プイッと横向きながら女性は恥ずかしそうに続けて喋ったが、最後のほうは小さくてよく聞こえなかった。

「知ってれば体当たりなんてやってないさ。さらに戻ってきたって言うには、ちよつと違うかな？逃げてただんだけどココに戻されたって言ったほうがいいかな？」

赤毛猿は起き上がったが、また戻ってきた俺を警戒したのかこちらの様子を伺っているようだ。

「戻された？ってことはこの一帯に結界が張られているだわ。」

「結界？」

「そう結界。封域結界ってやつね。右に行つてたはずなのに、いつの間にか左から帰ってくる破目になるっていう結界。ここに迷い込んだ誰かを留まらせるための物よ。」

「んじゃ出れないのか？ここから。」

「結界を維持するための物が何個か置いてあるはずだけど、無理ね。時間がない、来るわよ！」

赤毛猿はこちらに向かって真つ直ぐ突進することを選んだようだ。

俺達は左右に飛び避けたため、赤毛猿を間に挟む形になった。

猿は迷うことなく俺に向き襲い掛かってくる。なぜ俺ばかりを狙うのサッパリ分からんが…

——見える。右からくる燃える拳、押しつぶそうとする太い腕、口から吐く炎、全て分かる。更に目だけじゃなく、体も俺のイメージ通りに素早く動ける。猿の攻撃をヒラリヒラリと紙一重でかわし、たまに左手に持っている刀を鞘ごと殴りつけ反撃する。

素手だと猿の装甲を打ち抜くのは無理だろうしな。こいつが使えれば、今の俺なら勝てる可能性があるんだが…

チラッと俺の左手に持ったままになっている黒い刀を見た。

猿の攻撃を避けながら、ダメもとで俺は右手でもう一度抜いてみる。

ガキッ

やっぱり抜けない。

無理か……

そう俺が諦めかけたとき――

「認証完了。起動しますか？」

突如どこからか声が聞こえてきた。

？？？先ほどの女性は、俺とは離れた位置で背中に無数の氷の杭が浮いており、こちらに向かって手を開き、照準してるいるかのよう――マズイ。左の刀でカウンター気味に反撃し、そのままその場所から離れる。

その直後女性の氷の杭がこちらに向かって襲い掛かってくる。猿は口から炎を吐き1個はかき消したが、とっさに迎撃はそれだけしかできなかったようで、杭の何本かは猿の腕や腹に刺さり、あとの杭は地面へと突き刺さる。

あぶなっ！先ほどの場所から離れたとはいえ、撃つのタイミングが早すぎるよ！狙いも大雑把すぎるよ。3本ほど俺にも刺さりそうになったが、先ほどの見切りのようにギリギリで避け脱出。

これで猿も瀕死か？と思ったが、猿に刺さった氷は一瞬のうちに溶け、刺さっていた場所から緑色の血があふれ出していたが、それもすぐに収まり、腹や右腕に穴は開いているがこのくらいはかすり傷と言っみたいにまたしても起き上がり、今度は女性のほうを睨むが、何を思ったか最後にはまた俺のほうを向く。

はあゝゝタフだな、あの猿。そこまで頑張らなくなっ  
ていいと思うのに…

「起動しますか？」

やっぱり聞こえた。

## 起動しますか？（後書き）

どうもにやあプーです。読んでくださった方ありがとうございます。ぼちぼち更新していこうと思えますので、よろしくお願いします。今のところ戦闘ばかりですが、文章が下手なもので、もうちょっとかかる予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1202u/>

---

現実と幻の境域

2011年10月8日18時57分発行